誌上展示会「狩野文庫の世界～狩野亨吉と愛蔵書」

── 狩野亨吉生誕 150 周年記念企画展 ──

村上　康子，東北大学附属図書館展示 WG

平成 27 年（2015 年）は，狩野文庫の旧所蔵者である狩野亨吉博士（1865-1943）の生誕 150 周年にあたる。これを記念して，去る 10 月 5 日から 11 月 3 日に，企画展「狩野文庫の世界～狩野亨吉と愛蔵書」を附属図書館のエントランスホール展示コーナーと多目的室において開催した。

これまで例年の企画展において展示してきた多くの展示品は，そのほとんどが狩野文庫からの出展ではあったものの，その全貌を示し，旧所蔵者である「狩野亨吉」その人に焦点をあてた展示会は行うことがなかった。そのため，今回の企画展は，狩野亨吉の生誕 150 周年目を契機に，「江戸学の宝庫」「古典籍の百科全書」と評される「狩野文庫」について，国内随一の蒐集家としても名を馳せた「狩野亨吉」の生涯と人物像に迫ることで，当該コレクションの魅力を本学の学生・院生・教職員や一般市民の皆様にお伝えすることを目的とした。

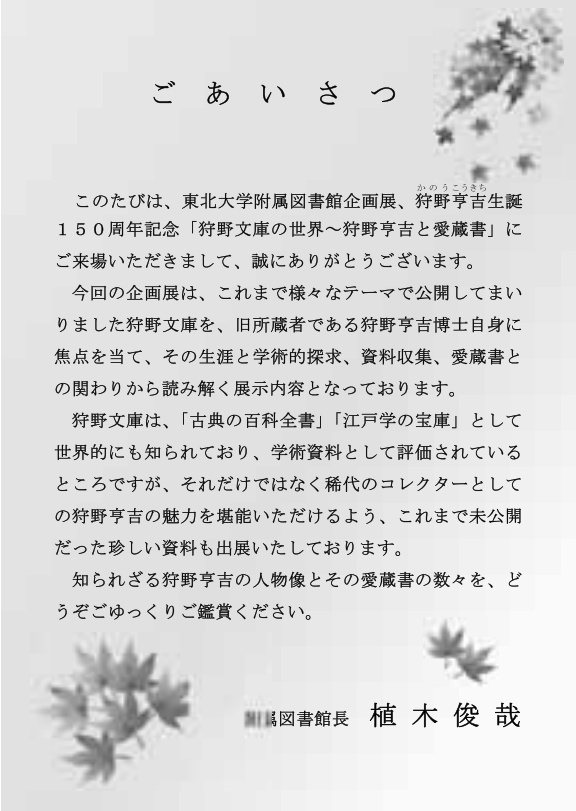
本文では，この展示会を誌上で再現し，当館の記録として収録するものである。

■広報

「狩野文庫の世界」ポスター
デザイン原案：影山　啓太
（附属図書館北青葉山分館整理・運用係）

「狩野文庫の世界」パンフレット
デザイン原案：山田麻友美
（附属図書館情報管理課事務補佐員）

1. プロローグ　～　パネル展示　（本館エントランスロビー展示コーナー）



ご　あ　い　さ　つ

このたびは、東北大学附属図書館企画展、狩野亨吉生誕１５０周年記念「狩野文庫の世界～狩野亨吉と愛蔵書」にご来場いただきまして、誠にありがとうございます。

今回の企画展は、これまで様々なテーマで公開してまいりました狩野文庫を、旧所蔵者である狩野亨吉博士自身に焦点を当て、その生涯と学術的探求、資料収集、愛蔵書との関わりから読み解く展示内容となっております。

狩野文庫は、「古典の百科全書」「江戸学の宝庫」として世界的にも知られており、学術資料として評価されているところですが、それだけではなく稀代のコレクターとしての狩野亨吉の魅力を堪能いただけるよう、これまで未公開だった珍しい資料も出展いたしております。

知られざる狩野亨吉の人物像とその愛蔵書の数々を、どうぞごゆっくりご鑑賞ください。

附属図書館長　植 木 俊 哉

パネル 1.　ごあいさつ

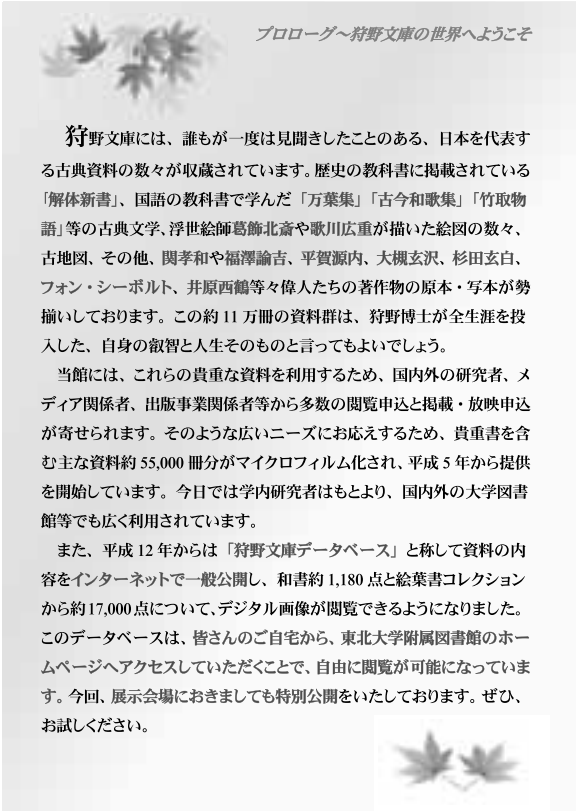
プロローグ　～

狩野文庫の世界へ
ようこそ

当館が所蔵する狩野文庫は、秋田県大館市出身の哲学者狩野亨吉（かのう　こうきち）博士が収集した約 108,000 冊からなるわが国有数の和漢古典の大コレクションです。和漢書古典を主体とする幅広い領域の資料を含み、「古典の百科全書」あるいは「江戸学の宝庫」とも称されます。「史記　孝文本紀　第十」（延久 5 年（1073）写）および「類聚国史　巻第二十五」（平安時代末期写）は、国宝に指定されています。その他本学指定の貴重書も、その過半は狩野文庫の資料です。

コレクションの価値は狩野の在世当時から高く評価されており、複数の大学から購入希望がありましたが、東北（帝国）大学初代総長だった親友の沢柳政太郎らの尽力により、その大部分が大正元年(1912)から 4 度に分けて当館に収められました。

パネル 2.　狩野文庫の世界へようこそ（1）



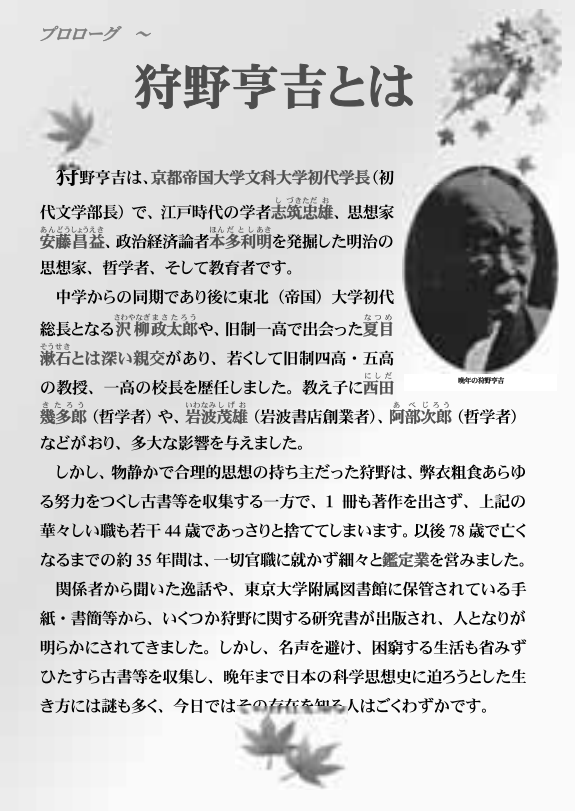
プロローグ～狩野文庫の世界へようこそ

狩野文庫には、誰もが一度は見聞きしたことのある、日本を代表する古典資料の数々が収蔵されています。歴史の教科書に掲載されている「解体新書」、国語の教科書で学んだ「万葉集」「古今和歌集」「竹取物語」等の古典文学、浮世絵師葛飾北斎や歌川広重が描いた絵図の数々、古地図、その他、関孝和や福澤諭吉、平賀源内、大槻玄沢、杉田玄白、フォン・シーボルト、井原西鶴等々偉人たちの著作物の原本・写本が勢揃いしております。この約 11 万冊の資料群は、狩野博士が全生涯を投入した、自身の叡智と人生そのものと言ってもよいでしょう。

当館には、これらの貴重な資料を利用するため、国内外の研究者、メディア関係者、出版事業関係者等から多数の閲覧申込と掲載・放映申込が寄せられます。そのような広いニーズにお応えするため、貴重書を含む主な資料約 55,000 冊分がマイクロフィルム化され、平成 5 年から提供を開始しています。今日では学内研究者はもとより、国内外の大学図書館等でも広く利用されています。

また、平成 12 年からは「狩野文庫データベース」と称して資料の内容をインターネットで一般公開し、和書約 1,180 点と絵葉書コレクションから約17,000点について、デジタル画像が閲覧できるようになりました。このデータベースは、皆さんのご自宅から、東北大学附属図書館のホームページへアクセスしていただくことで、自由に閲覧が可能になっています。今回、展示会場におきましても特別公開をいたしております。ぜひ、お試しください。

パネル 3.　狩野文庫の世界へようこそ（2）



プロローグ　～

狩野亨吉とは

狩野亨吉は、京都帝国大学文科大学初代学長（初代文学部長）で、江戸時代の学者志筑忠雄、思想家安藤昌益、政治経済論者本多利明を発掘した明治の思想家、哲学者、そして教育者です。

中学からの同期であり後に東北（帝国）大学初代総長となる沢柳政太郎や、旧制一高で出会った夏目漱石とは深い親交があり、若くして旧制四高・五高の教授、一高の校長を歴任しました。教え子に西田幾多郎（哲学者）や、岩波茂雄（岩波書店創業者）、阿部次郎（哲学者）などがおり、多大な影響を与えました。

晩年の狩野亨吉

しかし、物静かで合理的思想の持ち主だった狩野は、弊衣粗食あらゆる努力をつくし古書等を収集する一方で、1 冊も著作を出さず、上記の華々しい職も若干 44 歳であっさりと捨ててしまいます。以後 78 歳で亡くなるまでの約 35 年間は、一切官職に就かず細々と鑑定業を営みました。

関係者から聞いた逸話や、東京大学附属図書館に保管されている手紙・書簡等から、いくつか狩野に関する研究書が出版され、人となりが明らかにされてきました。しかし、名声を避け、困窮する生活も省みずひたすら古書等を収集し、晩年まで日本の科学思想史に迫ろうとした生き方には謎も多く、今日ではその存在を知る人はごくわずかです。

パネル 4.　狩野亨吉とは

狩野亨吉　年譜

西暦（和暦）	年齢（数え）	事　柄	社会の出来事
1865（慶応元年）	1 歳	9 月 18 日、出羽国秋田郡大館町で生まれる。	1867 王政復古の大号令 1868 戊辰戦争
1876（明治9 年）	12 歳	父の内務省出仕に伴い上京し、番町小学校に入学	
1877（明治 10 年）	13 歳	母死去	
1878（明治 11 年）	14 歳	第一番（東京府第一）中学校（現：日比谷高校）に入学	
1879（明治 12 年）	15 歳	一中を退学し、東京大学予備門に入学	
1884（明治 17 年）	20 歳	東京大学理学部（後に理科大学と改称）に入学	1885　太政官制を廃止，内閣制設置（初代総理伊藤博文） 1886　帝国大学令公布
1888（明治 21 年）	24 歳	東京帝国大学理科大学数学科を卒業	市制・町村制公布
1891（明治 24 年）	27 歳	東京帝国大学文科大学哲学科を卒業	1889　大日本帝国憲法発布
1892（明治 25 年）	28 歳	金沢の旧制第四高等中学校教授となる。	
1894（明治 27 年）	30 歳	四高を退職し、東京に戻る。	日清戦争
1895（明治 28 年）	31 歳	「志筑忠雄の星気説」を「東洋学芸雑誌」6 月号に発表	
1898（明治 31 年）	34 歳	1 月、熊本の旧制第五高等学校の教頭となる。	
		11 月、旧制第一高等学校校長となる。	
1899（明治 32 年）	35 歳	安藤昌益の『自然真営道』全1００巻9２冊の自筆本を購入	
1906（明治 39 年）	42 歳	京都帝国大学文科大学の教授（倫理学）となり、	1904 日露戦争
		京都帝国大学文科大学初代学長（初代文学部長）になる。	
1907（明治 40 年）	43 歳	文学博士の学位を受ける。	
1908（明治 41 年）	44 歳	安藤昌益の存在を初めて世間に紹介	
		10 月、京都帝国大学を辞任	
		辞任後、株で多額の借金を抱える。	
1912（大正元年）	48 歳	10 月、東北帝国大学図書館へ狩野文庫第一次納本（約 7 万冊）	明治天皇崩御
1913（大正 2 年）		皇太子（後の昭和天皇）の教育係を要請されるが、辞退	東北帝大に初の女子帝大生 3 名合格 1914 第 1 次世界大戦
		東北帝国大学総長の推薦があったが、辞退	
		西洋楽譜を東京音楽学校（現：東京芸術大学音楽学部）に寄付	
		この頃後輩の事業である鑪（ヤスリ）の製作所に投資して失敗	
1919（大正 8 年）	55 歳	小石川区で姉の前小屋久子と「明鑑社」という鑑定屋を開く。	
1923（大正 12 年）	59 歳	東北帝国大学図書館へ「狩野文庫」第二次納本	
1928（昭和 3 年）	64 歳	岩波講座『世界思潮』第 3 冊に「安藤昌益」を発表	
1929（昭和 4 年）	65 歳	東北帝国大学図書館へ「狩野文庫」第三次納本（寄付）	
1936（昭和 11 年）	72 歳	雑誌『思想』に「天津教古文書の批判」を発表	1937　日中戦争
1942（昭和 17 年）	78 歳	12 月 22 日死去	
1943（昭和 18 年）		東北大学へ「狩野文庫」第四次納本	

まさに絵に描いたエリートコース

後半生は、市井に埋もれ記録も少ない

古書鑑定に必要な目録や印譜が最後に収められた

参考資料：狩野亨吉の研究 / 鈴木正著 ミネルヴァ書房 2013.9
狩野亨吉遺文集 / 安倍能成編　岩波書店 1958.11

パネル 5．狩野亨吉　年譜

狩野を取り巻く人々

古くからの親友

さわやなぎまさたろう
沢柳政太郎（1865－1927）

明治･大正期の文部官僚、教育者。1900 年の小学校令改正（尋常小学校を 4 年制に統一、授業料不徴収）、1907 年の小学校令改正（義務就学年限を 6 年に延長）で中心的役割を果たす。1911 年東北帝国大学新設とともに初代総長(～1913)。
狩野とは中学以来の親友。最も良き理解者で、狩野を四高教授や一高校長に推薦し、また、その蔵書を東北大で受け入れるきっかけを作った。

なつめそうせき
夏目漱石（1867－1916）

文豪。一高時代に親しくなり、学生への援助や古書の購入等で貧窮していた狩野を在任している五高に招くなどした。**『吾輩は猫である』の苦沙弥先生や、『それから』の代助は狩野をモデルにしたといわれている。**
狩野は漱石の文学にはほとんど関心を示さず、「小説よりも講談のほうがずっとおもしろい」と言っていた。しかし、漱石全集の発刊に際して、岩波茂雄からの依頼により、その題字を書いている。また、大正 5 年、漱石が亡くなった際には、狩野が友人代表として弔辞を読んだ。この決定に異議を唱える者は、いなかったという。

すがとらお
菅虎雄（1864－1943）

ドイツ語学者。明治 23 年から 27 年ごろにかけての東大在学生･卒業生で構成された親睦団体”紀元会”のメンバーの一人。実直で無欲な性格が似ており、晩年まで親交があった。

京都帝大に狩野が招いたとされる研究者

ないとうこなん
内藤湖南（1866－1934）

東洋史学者。「大阪朝日新聞」「万朝報」などの記者として活躍し、明治 40 年、学歴が乏しかったため当初は講師として迎えられ、明治 42 年に教授となり、その後中国史学の発展に貢献した。

パネル 6．狩野を取り巻く人々（1）

こうだろはん
幸田露伴 (1867－1947)

狩野とは一中時代の同期。文学についての幅広い教養があり、明治 41 年から 1 年間、国文学の講師を務めた。親交は浅かったが、「あの人(狩野)ぐらい本を読むと、宗教なんか馬鹿らしいというのは当たり前だ」、「(戦時中物資が不足している状況で)狩野先生が火鉢を出されたのなら自分はストーブを出そう。」と折に触れ狩野のことを語っている。

くわばらじつぞう
桑原隲蔵 (1871－1931)

三高,東京高師の教授をへて明治 42 年教授となった。科学的歴史学をとなえ、東洋史学の確立に貢献。中国史と東西交渉史の分野で業績を残した。息子の桑原武夫は元東北大助教授。

にしだきたろう
西田幾多郎 (1870－1945)

“西田哲学”と呼ばれる独自の哲学を創建した国内最初の代表的哲学者。
四高時代の生徒。狩野の退職後、大正 2 年に教授となった。

鑑定業時代

いわなみしげお
岩波茂雄 (1881－1946)

1913 年(大正 2)神田に古書店岩波書店を開業した。同業者として教えを受ける代わりに、漱石が亡くなった翌年の大正 6 年に漱石全集の題簽を狩野に依頼して代金を払うなどし、陰で援助した。「尊敬する人格狩野亨吉先生の知遇を得た一事だけでも一高生活は自分にとって重大意義があったと感謝せざるを得ない」と語ったという。

こばやしいさむ
小林勇 (1903－1981)

岩波茂雄の女婿で、岩波書店会長。狩野が亡くなる前の数年間世話をし、死去後、遺品整理などを行う。『隠者の焔:小説狩野亨吉』(1971)で隠された人間像を描いた。

狩野を崇拝した人々

たなべはじめ
田辺元 (1885－1962)
京大教授。哲学者。「自分の学問の師はあきらかに西田博士であるが、人生の師は狩野博士である」。

くのおさむ
久野収 (1910－1999)
評論家。田辺元の弟子だが、狩野の晩年に”弟子入り”した。

はったみき
八田三喜 (1873－1962)
四高時代の教え子。以後 50 年間狩野の門弟となり、狩野を最もよく理解する一人。

あべじろう
阿部次郎 (1883－1959)
東北大教授。漱石山房の門下生。狩野は第一高等学校時代の校長であり、「生き方を決定づけられる出会いだった」という。

パネル 7. 狩野を取り巻く人々 (2)

プロローグ ～

古書収集のはじまり

狩野家は大館の士族で、狩野の父良知は資性温厚で優れた識見をもっていたといわれ、久保田藩（秋田藩）の家老格、藩校明徳館の要職を経て内務省に勤務しました。吉田松陰に認められるほどの漢学者でもあり、その父の影響を受けた亨吉も、幼い頃から秀才と言われました。

父の内務省出仕に伴い 12 歳で上京しましたが、戦乱や異郷という原体験、方言や容貌に由来する思春期の劣等感などが、人づきあいを厭い、物事の本質にじっくり取り組む性格を育んだといわれます。とりわけ、彼の性格に合ったのが書物の世界であったらしく、小学生のころから古書屋へ出入りし、他店で買った物を店の主人に批評させているうちに自然と教えられ詳しくなっていったといいます。以後も、普通の学生が菓子を買い、甘味屋に入るような時と費用を、本屋漁りにあてていました。

「三策」
狩野深蔵(良知) 撰著　安政 5 年(1858)

積極的開国を上策とする論を展開した書
松下村塾から出版された

パネル 8．古書収集のはじまり

プロローグ ～

科学的な見方

東大予備門（後の旧制一高）の頃、東京帝国大学動物学教授だったエドワード・モース（Edward Sylvester Morse 1838～1925）によるダーウィンの進化論の話を聞き、それまで学んできた学問とは違った世界観＝科学的な見方に大きな衝撃を受けました。後年狩野に弟子入りしたという評論家の久野収曰く、「この時代に、思想上の根本的転向があった」といいます。

ちなみに、モースは日本の陶器、民俗資料などを手当たり次第に収集し、今日では日本研究家としても有名です。狩野もマッチラベルや団扇のデザインなどを集めており、似ている部分があります。似ているから深く惹かれたのか、影響を受けてから真似るようになったのか、どちらだったのでしょうか。

同じ頃、進化論に基づき宇宙・生物・心理・社会・道徳の諸現象を総合的に説明したとされるハーバート・スペンサー（Herbert Spencer 1820～1903）にも傾倒し、さらに学問的興味が強く芽生えたといいます。

エドワード・モース
©Kodansha

パネル 9．科学的な見方

プロローグ ～

教育者の道へ

東大の数学科を卒業したとき、沢柳政太郎は文部省へ就職し、上田万年（のちの国語学者）はドイツに留学、尾崎紅葉はすでに中退していましたが小説家として注目され始めていました。同窓の者がそれぞれ道を歩み始める一方で、キャリアや名誉に関心のない狩野は、最も興味のあった哲学を追求するため 1 年間浪人して哲学科に再入学（編入）します。

2 つの学士号を持つ希有な存在を周囲が放置するはずはなく、大学院に進んで間もなく沢柳政太郎から金沢にある四高の教授の職を勧められます。思索に耽りたいのが本音でしたが、生活のため仕方なく官職に就き、一流の経歴が付き始めるようになります。

旧制高校の教授ともなれば、相当な高給取りでしたが、父への送金や、出身地秋田では当たり前の風習だったという書生数名との同居や学資援助などをしながら、加えて大量の書物の購入をするため、金銭はあっという間に底をついてしまいます。そこで日常的に同僚から借金する始末でした。

パネル 10．教育者の道へ

プロローグ ～

旧制一高　校長時代

明治 31 年（1898）、狩野は 34 歳という若さで母校の旧制第一高等学校の校長として迎えられ、約 8 年勤めました。生活のためとはいいながら、狩野は誰よりも早く出勤し、夕方までほとんど校外に出ない精勤ぶりを示し、教員たちの間に「一高の中におのれを埋没させ、人材が育っていくことだけを生きがい」とする風潮を培ったと評されます。

実質的な後任となった新渡戸稲造が、在職中の多くを台湾や欧米への出張で過ごしたのとは対照的で、ともに名校長として評されますが、「新渡戸は人をつくらず、社会に打って出て、狩野は人をつくって、社会に背を向けた」と言われました。

新渡戸 稲造（1862－1933）
岩手県盛岡市出身。札幌農学校を卒業し、ジョンズ・ホプキンス大学やボン大学で学び、ハレ大学で農業経済学の博士号取得。京都帝国大学からは、植民政策の論文で法学博士を受ける。札幌農学校教授、台湾総督府民政長官、京都帝国大学法科大学教授、東京帝国大学法科大学教授兼第一高等学校長、東京女子大学初代学長等々の役職を歴任。教育者・思想家。農業経済学・農学研究者。国際連盟事務次長も務め、著書に、“Bushido: The Soul of Japan”（邦訳『武士道』）があり、現在も読み継がれている。日本銀行券の五千円券の肖像としても知られる。国際的に活躍をした人物。

パネル 11．旧制一高　校長時代

プロローグ～旧制一高　校長時代

鳩山一郎氏の母を叱った話

『毅然とした亨吉を示す例としてよく引き合いにだされるのが、鳩山春子をギャフンとさせた寄宿舎入寮問題だ。ご存知鳩山一家は、今日に続く名門で秀才一家。戦後、総理大臣となった鳩山一郎の父は政治家、弁護士として知られた鳩山和夫。その妻の春子は共立女子大の創立者で典型的な教育ママ。当時の一高は、一年と二年の二年間は寄宿舎に入る制度になっていた。ここで「バンカラ」と「自治」に象徴される一高の気風が形づくられていくのだが、春子女史にはそれが気にいらなかったらしい。

一郎の一高入学に当たって春子女史は亨吉を訪ねる。そして『私の履歴書』（日本経済新聞社）によると「教育は家庭でするのが一番いい、一高の全寮制度は自分の子供のナイーブな感性を傷つけるから寮には入れない」と、一時間にわたって立て板に水を流すように弁じた。能弁の女史と寡黙の亨吉、しゃべりあいでは勝負にならない。亨吉は一言もいわず、黙って聞いていたが、春子女史の長広舌が終わると「鳩山家の教育が立派であることは、よく存じています。しかし皆寮制度の一高に入学して、それが嫌なら退学届を出してください」と言って席を立った。さすがの女史も、それ以上弁じ立てることはできずに引き下がる―』

『伝・狩野亨吉：栄達を捨てた哲人』渡部　和夫著　より

狩野校長は、生徒にも博学多識で合理的な考えを示しながら向き合い、難しい問題には信念を持って統括したといいます。

パネル 12．鳩山一郎氏の母を叱った話

プロローグ　～

大学長としての英断

明治 39 年（1906）、創設されたばかりの京都大学文科大学に転任し、期せずして初代大学長に抜擢されます。新しい大学を任された狩野は、自由な学風をめざして意欲をもって取り組みました。

当時の常識では、帝国大学の教授は大学卒の肩書きを持ち、欧米の留学経験が必須でした。ところが、狩野学長は、実力は申し分ないがそうした条件を欠く教授人事を断行します。一人は国文学の幸田露伴（こうだろはん）、もう一人は東洋史の内藤湖南（ないとうこなん）です。彼らが人文科学の歴史でどれほど重要な役割を果たしたかを、現在の私達は知ることができます。しかし当時は、この人事が軋轢（あつれき）を生み、狩野は大学の運営方法に失望して、表向きには病気という理由でわずか二年で辞職しました。

幸田露伴
©Kodansha

内藤湖南
©Kodansha

パネル 13．大学長としての英断

プロローグ　～

義理堅い人柄

借金の肩代わりに愛蔵書を売却

京大を辞職し、狩野としては研究に没頭できるこれからこそ人生の本番であるという心持だったかもしれません。しかし、経済観念の弱さは相変わらずで、家計は苦しいままでした。この頃、一高時代のとある教え子が狩野と親しくなります。理性的な狩野をどのように取り込んだのかは謎のひとつとされますが、その男に古書集めや住宅の管理をやらせる一方で、狩野は彼の誘いにのっていきなり株に手を出し、さらには事業の保証人となり、大きな負債を一手に引き受ける羽目に陥ってしまいます。

窮乏する狩野を助けるため、親友の沢柳は、営々と狩野が蓄積してきた蔵書を、東北帝国大学に売却することを薦めました。狩野の蔵書は、当時の金額で約 10 万円と見積もられました。現在に直すと、一説では一億円くらいといわれます。ところが狩野は、東北大学への売却金額をその三分の一にします。その代わりに付けられた条件が、東北帝国大学に一括かつ永久に保管する、ということでした。

半生かけて集めた蔵書を手放す胸中は察するに余りありますが、狩野は表に出さなかったといいます。

パネル 14．義理堅い人柄

プロローグ　～

安藤昌益

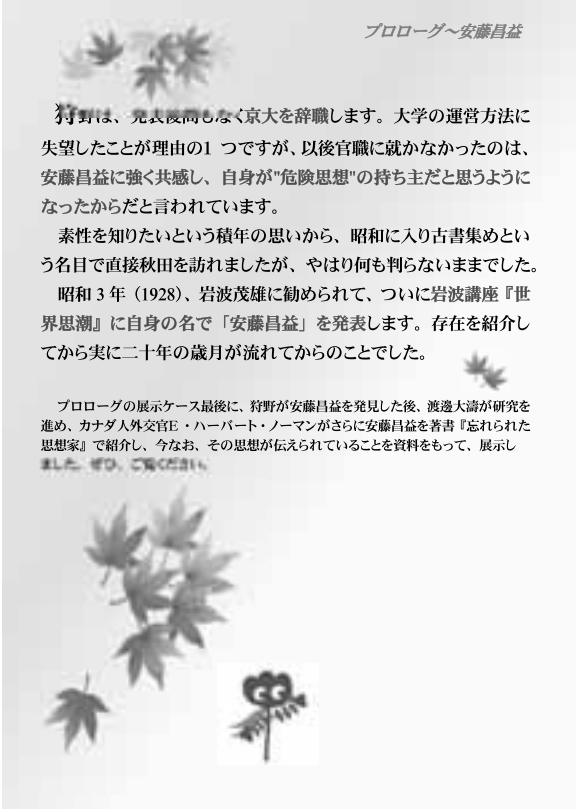
狩野によって初めて世に知られることになった思想家 安藤昌益の大著『自然真営道』の稿本は、彼が一高校長時代に入手したものでした。文章が難解なうえ、儒教・仏教・神道などを支配者の道具と見なし、徳川幕府を痛烈に批判、封建的身分制度などを否定する主張が盛り込まれていました。あまりにも過激で、常識をはるかに超えた内容に、当初狩野も狂人が書いたものと思ったそうですが、読むうちに社会主義・共産主義・無政府主義を訴える革命的思想に次第に魅せられていくようになります。

安藤昌益とは一体何者なのか、偉大な思想家を生んだ背景は何だったのか－。150 年程前に生きていた同郷秋田の医者であるということは、『自然真営道』を数年かけて読み解くうちに判りました。そこで、秋田の郷土史に詳しい人物に尋ねましたが、それ以上のことは当時何も判りませんでした。

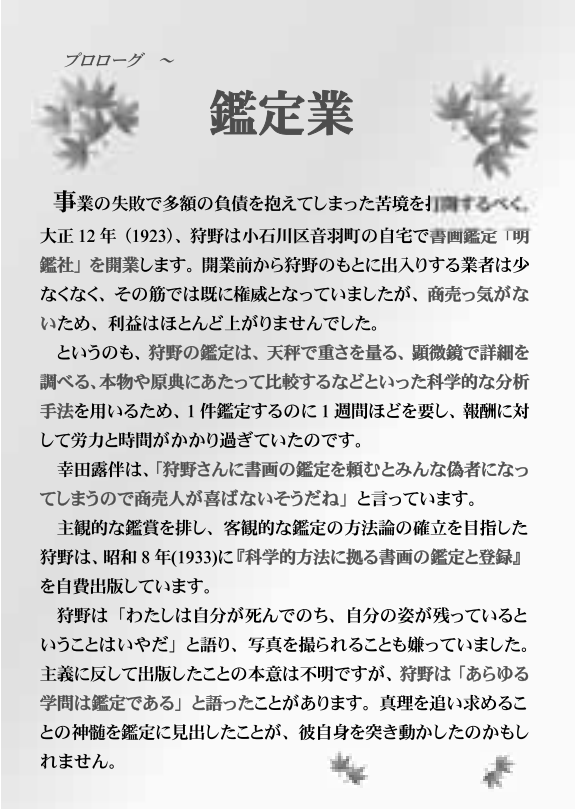
京都大学文科大学長の時に「大思想家あり」という談話を匿名で発表し、昌益の存在を世間に初めて紹介しました。

一方、世の中は自然を征服しようとする欧米型近代の文明を取り入れようという風潮で、江戸時代に花開いた日本人の優れた思索（たとえば和算など）を捨てようとしていました。亨吉はそんな状況に憂いを持ち、教育者として生きることにむなしさを覚え始めていました。

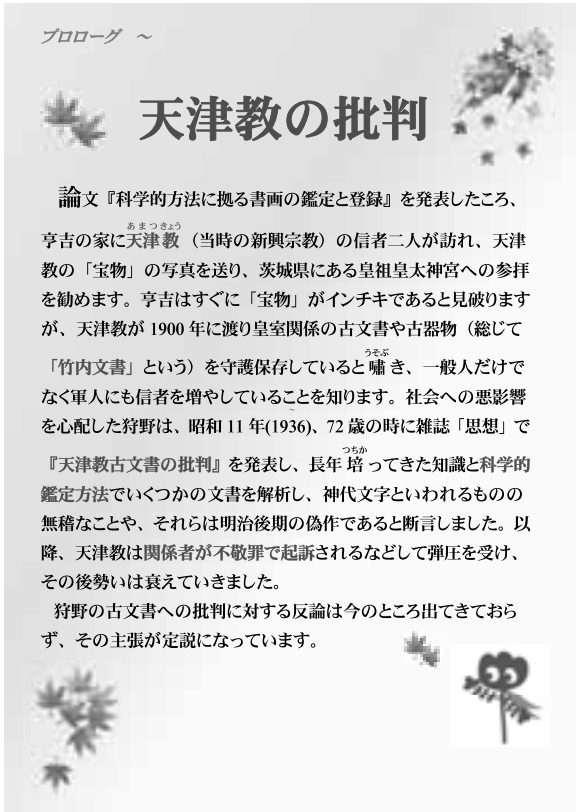
パネル 15．安藤昌益（1）



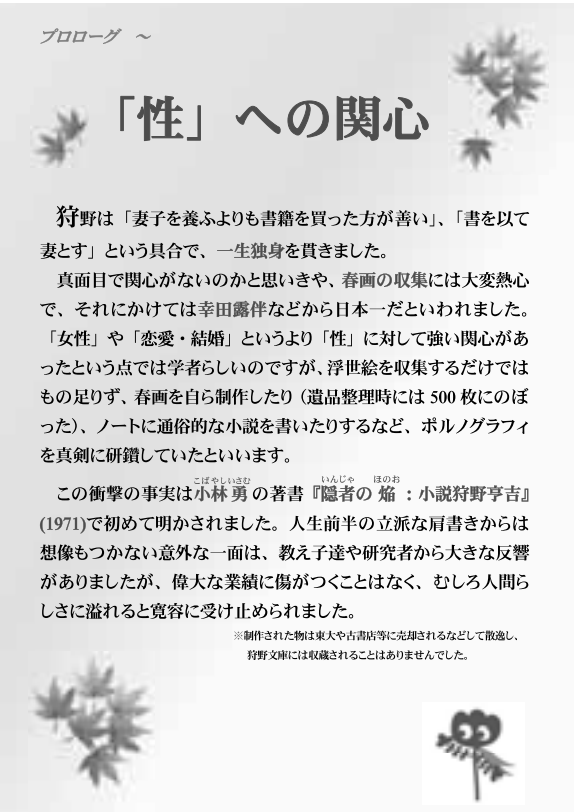
パネル 16．安藤昌益（2）



パネル 17．鑑定業



パネル 18．天津教の批判



パネル 19．「性」への関心

2. プロローグ　～　関連資料展示　（本館エントランスロビー展示コーナー）

晩年の狩野亨吉肖像写真

『狩野亨吉遺文集』
安倍能成　編
岩波書店
昭和 33（1958）年

「澤柳君と余との関係」　狩野亨吉　著

『澤柳政太郎全集　別巻』
澤柳政太郎研究
成城学園澤柳政太郎全集刊行会　編
国土社
昭和 54（1979）年

澤柳政太郎初代総長肖像写真

『澤柳政太郎全集　1』
実際的教育学
成城学園澤柳政太郎全集刊行会　編
国土社
昭和 50（1975）年

澤柳から狩野亨吉宛書簡

『澤柳政太郎全集　10』
随想・書簡・年譜・索引
成城学園澤柳政太郎全集刊行会　編
国土社
昭和 55（1980）年

夏目漱石肖像写真
大正元年 9 月　京橋にて

『漱石全集　第 8 巻』
行人（こうじん）
岩波書店
平成 6（1994）年

漱石から狩野亨吉宛書簡

『漱石全集　第 22 集〜第 24 集』
書簡　上・中・下

岩波書店
平成 8 年 - 平成 9 年（1996-1997）

ロンドン留学に関する漱石の苦悩の胸の内を，親友狩野亨吉に明かす一面を覗かせるなど，二人の親交が厚いものであったことが垣間見える。

「漱石と自分」　狩野亨吉　著

『東京朝日新聞縮刷版』
東京朝日新聞発行所
昭和 10（1935）年 12 月 8 日　日曜日

漱石全集題字
狩野亨吉　書

『漱石全集』の題字は，全集発刊にあたり，岩波茂雄の依頼により，漱石の親友であった狩野が書いたものである。生活に困窮していた狩野を援助する口実ともいわれている。

漱石全集題字

『漱石全集　第 17 巻』
岩波書店
昭和 12（1937）年

異なる版，装丁の場合，多少の違いがみられる。

定本竹内文献
武田崇元　編・監修
八幡書店
平成 11（1999）年

狩野が完全批判した「天津教古文書（あまつきょうこもんじょ）」と称されるもの。昭和 3 年に公開された際，皇室の出自に触れる部分があり，昭和 12 年，首謀者の竹内巨麿は，「不敬罪」で起訴となり，天津教は解散となった。

志筑忠雄（しづきただお）の星氣説（せいきせつ）　狩野亨吉　著
『東洋學藝雜誌　第 165 号』
東洋學藝社
明治 28（1895）年

志築忠雄は，狩野によって再評価された江戸時代中期の蘭学者。この論文は，志築が唱えた学説を一世紀を経て，狩野が発見し，紹介したものである。

安藤昌益と自然真営道
『渡辺大濤　昌益論集 1』
渡辺大濤　著
農山漁村文化協会
平成 7（1995）年

安藤昌益は，狩野が発見した江戸時代の思想家。

『忘れられた思想家』（岩波新書）
－安藤昌益のこと－　上巻・下巻
E・ハーバート・ノーマン　著：大窪原二　譯
岩波書店，昭和 25（1950）年

狩野が見出した安藤昌益を，さらに一般に知らせる契機となった“*ANDO SHOEKI AND THE ANATOMY OF JAPANESE FEUDALISM*”の邦訳。文中で，狩野の功績についても称賛している。

E.H. ノーマン　写真

『悲劇の外交官』
－ハーバート・ノーマンの生涯－
工藤美代子　著
岩波書店
平成 3（1991）年

『写真集　人間安藤昌益』

安永寿延　編著
山田福男　写真
農山漁村文化協会
昭和 61（1986）年

狩野亨吉の安藤昌益論を再読する

『現代に生きる安藤昌益』
石渡博明，児島博紀，添田善雄　編
御茶の水書房
平成 24（2012）年

安藤昌益没後 250 年，昌益発見者の狩野亨吉没後 70 年を記念して出版された論文集。

以上のようにプロローグでは，「狩野亨吉」自身や彼を取り巻く周辺の人々，主立った友人との交友関係を示すことで，その人物像が理解できるよう展示した。また，狩野が遺した業績が，社会に及ぼした影響についても触れ，学者としての顔を浮き彫りにした。このパネル展示を観覧した後に，引き続き多目的室での本展示へ誘導する内容となっている。

【プロローグ展示担当者】（敬称略）
展示監修：曽根原　理（東北大学学術資源研究公開センター（史料館）助教・附属図書館協力研究員）
パネル作成・資料展示・キャプション作成：
村上　康子　（附属図書館情報サービス課長）
藤本　菜穂子（附属図書館工学分館整理・運用係長）
資料展示補助：
福井　ひとみ（附属図書館情報サービス課閲覧第二係長）

3. 本展示　～　第 1 部から第 4 部　（本館多目的室）

多目的室においては，狩野文庫受入に至った当館の歴史的経緯や狩野亨吉のコレクターとしての人物像，学術的・科学的な根拠に裏付けされた鑑定家としての側面，それ故の学術的業績，1 人の蒐集家が生涯をかけて集めた貴重なコレクションを余すことなく展示するべく，第 1 部から第 4 部までの展示資料の選定を丁寧に吟味した。それでもなお，10 万 8 千点以上もある資料を全て展示することは叶わないことから，これまで展示することのなかった貴重な資料群の中からの逸品や，公開してこなかった秘蔵の春本などを展示するに至った。

狩野文庫の資料の数々は，数学科と哲学科の文理双方を修め，学術的見識を以て蒐集された狩野亨吉の生涯のすべてであるといっても過言ではない。展示された資料の一点一点から，さらに狩野亨吉という人物像が見いだせるよう，特徴的な選定を行った。

◆　第 1 部　コレクター狩野亨吉

ここでは，狩野文庫の成立についての歴史的経緯，貴重書庫に保管していた当時の事務文書，狩野亨吉についての研究書，生粋のコレクターを思わせる珍品，学術的業績について展示し，膨大なコレクションを形成するに至ったコレクター狩野亨吉の人物像を体感できるような内容となっている。

◇　狩野文庫の成立

当館が所蔵する狩野文庫は，狩野亨吉が収集した約 10 万 8 千点からなるわが国有数の和漢古典の大コレクションである。和漢書古典を主体とする幅広い領域の資料を含み，「古典の百科全書」あるいは「江戸学の宝庫」とも称される。大正元年から昭和 18 年までの間に計 4 回に渡り，購入や寄附によって，東北大学附属図書館の蔵書となった。現在では，準貴重図書に指定されている。

生活に困窮していた狩野を救うため，当時本学の総長であった親友沢柳政太郎が，莫大な個人蔵書購入に奔走したことがその始まりであった。

沢柳は，東北帝国大学新設に際し，「仙台に，できれば第二国立図書館を作りたい」と語っていたほど，大学図書館への思い入れがあったようである。

『狩野文庫概説』の村岡典嗣第三代館長の記述によれば，大正元年 9 月に，沢柳が狩野の蔵書を購入するために，仙台市出身の荒井泰治貴族院議員に寄附の依頼を行い，当時の事務官黒田賢一郎とともに，幾度かに渡り，交渉を行ったという。結果，寄附は年 5 千円ずつ 6 年間で 3 万円ということになった。この額は，狩野が澤柳からの 10 万円という提案に対して，「図書は取り纏め，厳に散逸を防ぎ，永久に仙台の東北帝国大学に保存すること」を条件に決定している。これが第 1 回納入となる。

第 2 回納入は，大正 12 年，本館の経費を以て，大同洋行を経由して購入となる。購入額は，1 万 1 千 503 円 86 銭。この時の担当者が本館初代司書官の水島耕一郎である。

第 3 回納入は，昭和 4 年に狩野の寄附によるもので，最後の第 4 回納入は，狩野の死後，昭和 18 年である。狩野が死の間際まで手放さなかった蔵書や鑑定に必要な古書目録，蔵書印の切貼帳の類であった。

東北帝國大學圖書館蔵書印（左）

東北帝國大學圖書館　大正初期

東北帝国大学図書館は，大学創設四年後の明治 44 年（1911）6 月 14 日に，学内規程により制定施行された。初代館長には，当時理科大学教授で和算研究者であった林鶴一が任命された。大正 5 年（1916）年 5 月には，官制の改正により，正式に官制上の設置となる。

荒井泰治（あらいたいじ）氏寄附による狩野文庫受入印（右）

東北帝國大學附属圖書館　作成時期不明

生活に困窮した狩野を見かね，親友だった東北帝国大学初代総長の沢柳政太郎は，仙台市出身の貴族院議員，荒井泰治氏に数度にわたり申し入れを行い，その寄附により狩野文庫第 1 回受入が実現した。寄附は，5 千円ずつ 6 年間に渡って行われた。この受入印は，当時のものである。

荒井泰治氏肖像写真

『荒井泰治傳』
奥山十平，新井一郎　編
明文社
大正 5（1916）年

狩野文庫受入目録

狩野亨吉　自筆
東北帝國大學圖書館
大正時代

荒井氏からの寄附が決定し，第 1 回狩野文庫受入の際に，狩野自ら編成に従事した自筆の受入目録。洋罫紙帳面 41 冊に収められた目録を，図書館側で上下 2 冊に合本し登記目録とした。現在は，貴重書庫に当時の寄附関連書類や大正 12（1923）年第 2 回受入時の事務文書とともに保管されている。

第 1 回納入時関連文書

狩野亨吉（下），黒田賢一郎（上）　自筆
大正時代

当館貴重書庫に保存されている「狩野文庫」受入時の書簡や事務文書の中から，第 1 回納入に関わった荒井泰治議員宛書簡と狩野亨吉から当館へ宛てた書簡を公開。情報公開制度が整った現在と異なり，当時の大学事務の裏方資料は，一般市民へこれまで公開されることは，あまりなかった。この他，第 2 回納入時文書やそれ以降の寄贈分についても文書が保管されている。

圖書原簿（狩野舊藏書）和漢書の部

東北帝國大學圖書館　成立年代不詳

狩野文庫は，大正元年から昭和 18 年の間，4 回にわたり購入や寄贈により受入れられたが，その膨大な量から図書館での整理は約 30 年を費やした。この図書原簿はその一部である。当時の原簿は，司書が一筆一筆手書きにより，カード目録同様に書誌事項等を記していった。通常登記日などを記載するが，狩野文庫の場合，その量の多さから受入と同時に全ての書誌事項を記載することは困難であった。大正 11（1922）年 8 月には，法文学部新設を機に，法文学部図書と狩野文庫の整理専任者として，水島耕一郎と東川徳治の両名が嘱託に任命された。

狩野文庫概説

東北帝國大學附属圖書館

昭和 12（1937）年

狩野文庫受入の経緯や分類表について，詳細をまとめた解説書。昭和 4（1929）年 9 月に辞任した武内義雄館長に代わり，第三代館長村岡典嗣 (むらおかつねつぐ) 教授（法文学部）によって記されたという記載がある。狩野文庫の分類表は，当時図書館で使用されていた「十門別」を基に，収蔵資料の特色を考慮したものとなっている。

東北帝國大学所藏狩野氏舊藏書假目録

東北帝國大學附属圖書館

大正 3（1914）年

狩野が自ら作成した受入目録の中より，当時の書物番号第 1 号から第 13712 号と，『大正 2 年 9 月本学開学式挙行の際，陳列の為に送本された「貴重書の一部」及びその他の目録を添へて』印刷し，関係各方面に配布された仮目録。緒言に，「詳細なる目録は，全部の整理完了するを俟つて編纂發行せんとす」とあるが，今現在も一部未整理の文書・資料があり，その全貌を記録した目録は未だに作成されていない。狩野文庫の資料の多様性と，他に類を見ない圧倒的なその量が理由であろう。

狩野亨吉の生涯
青江舜二郎　著（中公文庫）
中央公論社
1987（昭和 62）年
狩野亨吉について記された数少ない著作の一つ。狩野の出生前から死後に至るまでを詳細に記している。青江氏は本書の中で，学歴の乏しい内藤湖南を新設の京都帝国大学教授抜擢に際し，大反対の文部省をねじ伏せた代償として，栄職を捨てた狩野の人物像に惹かれたことについて触れている。（1974 年明治書院刊の復刊）

伝・狩野亨吉　栄達を捨てた達人
渡部和夫　著
秋田魁新報社
昭和 60（1985）年
著者は，秋田魁新報社の論説委員を務めた。大館出身の狩野は，一代の碩学と謳われた人物だが，その全体像を書いたものが少ないため，自らそれを追ってみたと，本書あとがきにおいて記している。本書は狩野の「栄達を捨てることにより己の思想を貫」いた哲人的な生き方に焦点を当てている。

狩野亨吉の研究
鈴木正　著
ミネルヴァ書房
平成 25（2013）年
狩野亨吉に関する本格的な研究書。本書は，昭和 45 年に刊行されたものの復刊となる。著者は，他に『狩野亨吉の思想』を著すなど，「狩野亨吉」に魅せられた思想史研究者の一人である。

◇　コレクター狩野亨吉

狩野が死去する際にまで手放さなかった蔵書の中には，洋装本や，すでに大学に納めたものと重複する版本など，わざわざ納めるに値しないと思われたようなものがある。しかし，現在となっては，それなりの価値や意味のあるコレクションとなっている。狩野は，ともかく集め，分類し保存するという性癖があったらしく，マッチラベルや団扇のデザインなどを貼り付けたノートも残されている。

狩野文庫の特色は，単に数が多いだけではなく，内容の多様性にある。狩野は古書店に行くと棚単位で買いつけ，一通り点検して良いもの，入手していないも

のは残し，そうでないものは返しながら，蔵書を充実させていったという。また，古書店が扱いに迷うものを持参し狩野に鑑定してもらうこともあり，特色のある書物を真っ先に入手できたようだ。

世の中に，自分の関心がある分野のコレクターは多いが，狩野は，日本人の知的営為の総体を研究対象としたところがあり，自身が文系・理系あらゆる学問に通じていたこともあり，さまざまな分野の書物が集められている。そのため，文学，歴史，医学などはもちろん，囲碁，将棋，料理，花火，蹴鞠（けまり）など諸々の書物が収められている。一人の著者がさまざまな分野で活動していたとしても狩野文庫であればその全体を捉えることが可能なのである。

また，暦（こよみ）などのシリーズものは，出来る限り揃えるよう努力した跡が窺える。同じ書物であっても，異なる部分があれば，揃って収蔵されたようだ。狩野自身が書誌学の大家であり，多少でも違いがあれば手元に残した結果と思われる。（『ものがたり東北大学の至宝』曽根原理執助教執筆部分より抜粋）

燐寸（まっち）ペーパー帳

狩野亨吉　蒐集　成立年代不詳

狩野は，ともかく集め分類し保存するという性癖があったらしく，わざわざ文庫に納めるに値しないと思われたようなものもあったが，現在となっては，それなりの意味や価値をもつコレクションとなっている。

この資料は，あらゆるマッチ箱のラベルを貼付したもので，芸術的な図柄から，古き良き時代を垣間見ることができる。

絵葉書コレクション

狩野亨吉　蒐集　成立年代不詳

こちらも，狩野のコレクターとしての一面を窺い知ることのできる一大コレクションの一つ。古今東西の様々な出来事やあらゆる場所などを素材とした絵葉書からは，百聞は一見に如かずとばかり，歴史的な背景や当時の社会生活・文化を知ることができる。

古写真，絵画，イラスト，広告，観光案内，記念品等々，現在も未整理のまま保管されている絵葉書があり，その数も膨大である。

千里眼記事　乾（けん）／坤（こん）

狩野亨吉　蒐集　成立年代不詳

明治末に世間を騒がせたいわゆる「千里眼事件」に関する，あらゆる新聞記事を余すことなく調査し，収集し貼付したスクラップブックである。狩野の凝り性な一面を覗かせている。

この事件は，透視・念写の能力を持つとされた御船千鶴子や長尾郁子について，東京帝国大学の福来友吉博士や京都帝国大学の今村新吉博士らの学者が，公開実験実施やその真偽を論争した一連の騒動で，真相が解明されないままに終焉を迎えた。ちなみに，福来教授は旧制二高に学んでいる。

スクラップ・ブック　2 冊

狩野亨吉　蒐集　成立年代不詳

こちらも，狩野の収集癖を見ることのできる資料である。晩年，鑑定士として余生を送っていた頃のもののようで，芸術や芸能に関する新聞記事が 2 冊のスクラップ・ブックにびっしりと貼り付けられている。博物館の展覧会広告，浮世絵，仏像，芸術雑誌の刊行予告，高村光雲（こううん）等著名な芸術家の記事など，狩野の趣味の部分と鑑定士としてのプロ意識が見え隠れしている。狩野にとっても，当館にとっても，この世に 2 つとない逸品である。

◇　狩野と自然科学　〜　学者たちの発見

狩野は高校時代，どちらかといえば数学を苦手としていた。その彼が，東京帝国大学入学の際に，理学部の数学科を専攻して周囲の人たちを驚かせた。「すべての科学の基礎である」というのが数学を選んだ理由であった。五年後，同大学哲学科に再入学（編入）し，さらに人々を驚かせた。さらに一年だけ在籍した大学院では，哲学と数学をひとつのものとする見方に沿って，研究を続けていた。

明治二五年に第四高等学校に教授として赴任した際には，金沢の教え子たちに数学や暦学に関し，「江戸時代の日本では，中国から渡ってきた数学が独自に発達し，同時代の西洋にも劣らない和算が成立するなど，科学的思考を持つ優れた先覚者がいた」ことを講演し，学生たちは，「日本人の科学的思索に関する自信を与えられた」という。

その先覚者であった関孝和や数学的思考にもとづく独自の経済思想で幕末の北方政策に影響を与えた本多利明らに，早くから注目したのが狩野であった。「文明開化」のスローガンのもと，ともすれば「日本人は西洋人にはかなわない」「日本人は独創とは無縁，物まねしかできない民族」という風潮があった明治時代，狩野の研究はそれと真っ向から向き合い，その劣等感を克服する内容を持っていた。彼の和算の蔵書は，日本でも有数のコレクションとなり，狩野文庫に現存している。

他にも，江戸時代後期の天文学者で「鎖国」の語を最初に使用した志筑忠雄についても紹介をしている。それまでほとんど知られていない学者の「発見」は，狩野の独創性を示すものである。

狩野が一高時代に稿本『自然真営道』92 冊を入手したことがきっかけで，後に，江戸時代の独創的思想家であり，日本思想史上の巨人である安藤昌益を発見し，世にその思想を知らしめることとなったのも，必然的なことだったのかもしれない。(『ものがたり東北大学の至宝』曽根原理執助教執筆部分より抜粋・再編)

「安藤昌益」　狩野亨吉　著
岩波講座『世界思潮　第 11 冊』
岩波書店
昭和 5（1930）年
狩野が公表した数少ない文章の一つである。「安藤昌益」を見出したのが，明治 32（1899）年，34 歳のとき，それから 29 年が経過した後となる。弟子の久野収氏によれば，「真理の迂回戦法」ともいうべき，「思想の平和的共存」を考慮したものであったということである。

安藤昌益と自然眞營道
渡邊大涛（だいとう）　著
木星社書院
昭和 5（1930）年
狩野が入手した「自然眞営道」92 冊から，後に「江戸時代の独創的思想家安藤昌益」を見出した経緯を紹介し，この思想について言及した研究書である。狩野自身この思想書を「狂人が書いたものにちがいない」と思ったほど，当時の日本社会では考えられないような，差別のない「自然世」を説いたものであった。

「天津教古文書の批判」　狩野亨吉　著
『思想　第 169 号　特輯日本文化』
岩波書店　昭和 11（1936）年
昭和 3（1928）年 5 月末に，天津教信者が狩野を訪れたことに端を発し，後に天津教古文書 5 枚の写真を鑑定した経緯を論文に認めたもの。天津教の背後に多くの軍人信者がいることに気づき，日本の行く末を案じ，偽物に潔癖な狩野は，怒りと憂いをもって，この論文を執筆したという。

神代文字神靈寶卷（じんだいもじしんれいほうかん）

巻子 2 軸　成立年代不詳

狩野が完全批判した天津教経典（竹内文書）にあたる資料の写本である。狩野は天津教古文書の批判の際に自ら文書の神代文字を解読し，偽りの書であることを鑑定した。展示部分は狩野が鑑定した竹内文書の写真のうち，第四の文書「平群眞鳥（へぐりのまとり）眞筆」の第一枚に該当する。論文「天津教古文書の批判」（前述）発表以後，この鑑定内容を覆す研究は未だにない。

本多利明先生行状記

1 冊　写本　年代不詳

本多利明は江戸後期の和算家・経世家。越後出身。江戸で，数学・天文学・蘭学などを学ぶ。また，日本各地を踏査し，見聞を広めた。主著は『経世秘策』，『西域物語』。

本資料は，狩野が自ら筆写したもので，本多に対する強い関心がうかがえる。狩野は晩年まで音羽近辺に居住していた。その理由については「音羽の聖人といわれた本多利明を尊敬して」のことであったという逸話も残っている。

オクダント用法記

2 巻　図式 1 巻　写本

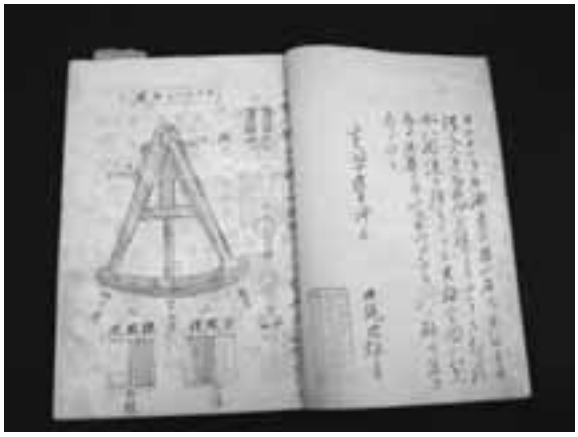
本多利明　撰　年代不詳

本多利明は江戸後期の経世家として名高いが，数学家としても，オランダの航海表により 7 桁の対数表や三角関数等を編集した『大測表』を著し後世に影響を与えた。本書には航海術に用いる八分儀の使い方等を記している。狩野亨吉は本多について「数学家として，航海術の元祖として，将た憂国家として，我國の歴史に特筆すべき人であると信ずる」（『狩野亨吉遺文集』“記憶すべき関流の数学家”より）と述べている。

諸処経緯度及方位里程

1 冊　本多利明　撰　写本　年代不詳

数学者・地理学者でもある本多は，西洋先進国の緯度に着目し，日本の国力増強と国防の観点から現在の北海道以北を重要な土地と考えていた。著書『西域物語』（1798 年）では，ロンドンが北緯 51 度であることを挙げ同緯度のカムチャッカ半島への遷都を提案している。本書には主要地の経緯度，方位，距離などを記している。



八圓儀記

1 冊　志筑忠雄　著　写本　年代不詳

志筑忠雄は，狩野が優れた日本人として評価した江戸期の蘭学者の一人。オランダ通詞の家に育ち，ニュートン力学を日本に初めて紹介すると同時に，「重力」など当時日本には存在しなかった科学用語を多く作り出した。本資料は，志筑忠雄が記した八分儀（オクタント）に関する書の写本。八分儀とは航海術において天体の高さを測るための機器。

【第 1 部展示担当者】（敬称略）

展示監修：曽根原　理

大原　理恵（東北大学学術資源研究公開センター（史料館）助教・附属図書館協力研究員）

パネル作成・資料展示・キャプション作成：

村上　康子

資料展示補助：

福井　ひとみ

阿部　郁子（附属図書館情報管理課事務補佐員）

及川　啓子（附属図書館情報サービス課閲覧第一係事務補佐員）

◆　第 2 部　狩野文庫の至宝

ここでは，国宝 2 点を含む，学術的文化的価値の高いと一定の評価をされている逸品を展示している。

海外の研究者から注目されている資料もあり，本学のみならず，日本の至宝といっても過言ではない資料の数々である。狩野亨吉の鑑定眼がいかに優れたものであったかということがここに証明される。

坤輿萬国全図（こんよばんこくぜんず） 利瑪竇（マテオ・リッチ） 編 折 2 枚（写本）（上）

イタリア人のイエズス会宣教師マテオ・リッチが，1602 年に出版した世界図である。東洋を中心とした世界図としては，現存するもので最古のものである。中央部には世界図が描かれており，周辺には天文学・地理学などの当時の最新の科学的知識が記録されている。

日本には，江戸時代初期に伝来し，江戸時代中期以降の日本人の世界認識に大きな影響を与えた。

萬暦年間北京城内圖（ばんれきねんかんぺきんじょうないず） 1 幅

［明萬暦刊］（木版手彩）（左）

北京の紫禁城内城を描いた木版手彩図。今でいう，萬暦版「古都北京の歩き方」である。上段の韻文に「当今」の萬暦帝の福寿について触れていることから，萬暦年間に印刷されたことがわかる。現存する北京城の図では最も早期のもので，宮殿・官署・寺廟の配置や，当時の人々に意識されていた都市景観を窺ううえで貴重である。

【国宝】史記 孝文本紀 第十 1 軸

（漢）司馬遷 撰 （劉宋）裴駰 集解

延久五（1073）年 大江家国 写

孝文帝は前漢第五代の皇帝。中国前漢の司馬遷が著した歴史書「史記」を書写・加点（日本語で読むための記号）したもので，平安時代の延久五（1073）年写，康和三（1101）年・建久七（1196）年・建仁二（1202）年，大江家国以下の校合加点（書き入れ）と奥書に見られる。年代が明記されたわが国最古の史記写本であり，昭和 27 年，国宝に指定された。

類聚國史（るいじゅうこくし）　巻第二十五

1 軸　菅原道眞　撰　平安末期　写

古代日本の正史の記事を，菅原道眞選により分類・編纂したもの。分類の中には地震を集めた箇所もある。892 年（寛平 4 年）に完成した歴史書で，もとは計 205 巻あったが，応仁の乱（応仁元（1467）年～文明 9（1477）年）で散逸したとされ，現存するのは計 62 巻である。昭和 27 年，国宝に指定された。

類聚三代格（るいじゅさんだいきゃく）

1 冊　写本　年代不詳

類聚三代格とは，平安中期（弘仁・貞観・延喜の 3 代にわたる）の法令集。本書は通常の写本とは異なり，抜き書きとなっている。本書からはそれまで知られていなかった逸文が見つかっている。

君臺觀左右帳記（くんだいかんそうちょうき）

眞相　撰　永禄 2 年（1559）写

室町時代の座敷飾りのマニュアル。能阿弥や相阿弥が記録したものの伝書。先進の中国文化をいかに取り入れ，日本の美意識が形成されていったかも垣間見える。本資料は骨董鑑定人や茶人に重要視された資料なので，写本や刊本は多く残るが，原本はない。本書は原本に近い形態を伝える良書の一つとされている。

本草綱目（ほんぞうこうもく）　52 巻図 2 巻

（明）李時珍　編　男李建中　補輯

男李健元　圖　孫李樹　宗校

萬暦 24（1596）年刊　（萬暦金陵胡承龍版）

中国の金陵（南京）から刊行された代表的な「本草」の書。食物や薬物になる有用な産品を網羅し，自然科学の基礎を提供した。完全に揃った初版金陵本は世界中探しても少ない数しか確認されていないという。

【第 2 部展示担当者】（敬称略）
展示監修：大原　理恵
資料展示・キャプション作成：
福井　ひとみ
阿部　郁子
及川　啓子

◆　第 3 部　亨吉の探求と再発見

狩野文庫の 10 万冊余りの資料は，狩野亨吉が自らの眼で 1 点 1 点吟味し，コレクションとして残したものである。それらはどのような視点で集められたのだろうか。

◇蒐集と探求

狩野文庫の分野の広がりは，そのまま狩野自身の百科全書的な関心と探求の結果とみることができる。その探究を支えたのは，狩野の若い頃からの問題意識であるという。

「自分は数学物理学の研究に没頭して其力により，精神現象を説明せんとする考えである。」

（狩野亨吉「沢柳君と余との関係」1928.3）

「又学生時代に，日本の思想史と云うものを調べて見たいと云う考えがありまして，その考が後まで幾らか影響して居ったわけですが，併し思想と云うても単に哲学とか宗教とか云うようなことに限らないで，科学でも芸術でも皆入れてやる積りであったのですから，何となしに集めたのです。」（「狩野博士に物を訊く会」）

隠遁者のイメージがある狩野だが，狩野文庫を見れば，日本の精神文化や日本人の資質に対する関心も生涯を貫いており，当時の西欧近代に直面した日本の知識人としての面も色濃くあったといえる。

◇亨吉の眼

本展示の目的は，狩野文庫の貴重な資料を紹介するだけでなく，蒐集された資料を通して，狩野亨吉の人物像をたどることでもある。和算資料の蒐集と埋もれた思想家の（再）発見は，狩野の才能や関心の在りかを示す顕著な成果といえる。それ以外にも，資料と彼の言葉からその独自な視点を窺うことができる。例えば，文学者である幸田露伴は，狩野のことを*「七十すぎの年寄りが手妻の本など買うなんてよほど奇妙だよ」（小林勇『蝸牛庵訪問記』）*と評した。「手妻」とは手品のことだが，狩野には違った切り口があった。

「天文学は其位でありますが，物理学ではどうかと云ふと，物理学と云ふものは大体ない。日本に於ては大体なかったのでありますけれども，物理学的な問題を考へた人がある様であります。享保頃の人でありますが，名古屋の不破善五郎と云ふ，手品の研究をやった人，その人が書いた書物の中に，物理的の問題があります。」

（「狩野博士に物を訊く会」）

和算や天文学と異なり，江戸期以前の日本人には物理学に関する成果が見つからなかったが，手品書の中に，その萌芽的な問題意識だけは認められたという。

また，狩野文庫にある『稲生平太郎物語竝稲生物怪録』は，稲生平太郎という実在の人物が経験したとされる妖怪物語であるが，表紙見返しに狩野の言葉が記されている。

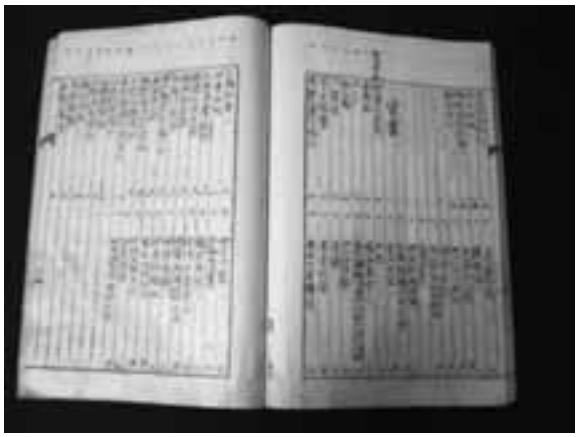
「稲生は一時精神に異状ありしか若しくは欺瞞の常習ありし人と想はる」

稲生物怪録は，国学者である平田篤胤にも注目され，当時は単なる物語以上の資料と見なされたらしい。狩野の言葉はこれを踏まえたものと思われ，狩野の合理主義者の一面が窺え面白い。

第 3 部では，狩野亨吉個人によって収集された膨大な専門書の一部を，本学による分類に沿って紹介していく。展示解説は，狩野の視線や資料の蒐集動機が想像可能なヒントを加えてある。

【第一門】総記・雑書

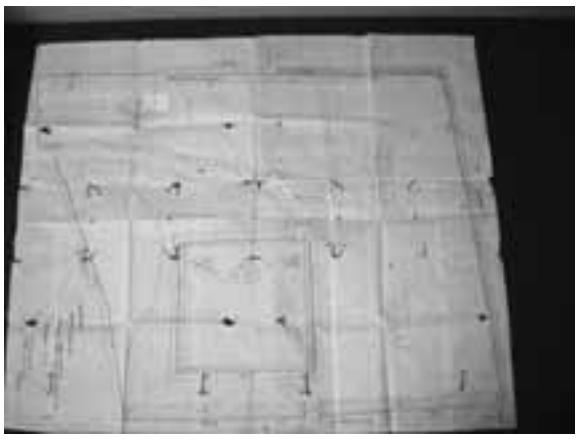
明徳館書物目録　1 冊　明治 28 年（1895）　狩野亨吉　写（左下）
後年，鑑定業で暮らしを支えた狩野は，書籍目録や入札目録，印譜など数千冊に及ぶ書誌的資料を所蔵していた。目録資料は古今にどんな書物が存在したかを語るものであり，その充実は狩野文庫の特徴の一つといえる。書目類は全数の半分以上が，狩野没後の第四次納本（1943）において遺贈され，最も多かった第一次納本時には殆ど含まれていなかった。（原田隆吉「「狩野文庫」の蔵書構成の研究（2）」.『図書館学研究報告』，vol.16. 1983）



明徳館書物目録　1 冊　前小屋傳之助　写　成立年代不詳　　昭和 5 年（1930）狩野入手　（右上）
狩野の郷里である久保田（秋田）藩の藩校である明徳館は，創設（寛政元年 /1789）から廃藩置県による自然閉鎖まで，秋田の教育・学問の中心だった。狩野や狩野の父もまたこの藩校に学んだ。江戸期の秋田藩には独立した板元が無かったため，副業・趣味的な板元のみ数軒あったが，明徳館はその一つとして，教本の自給自足用に出版を行っていた。本資料は狩野の姉・久子の嫁ぎ先の蔵書に含まれていた。

【第二門】哲学・宗教・教育

鷹山公訓女文（ようざんこうくんじょぶん）並外三種　4 巻 4 冊　写本　年代不詳
鷹山は江戸中期の大名で米沢藩第 9 代藩主上杉治憲の隠居後の号。質素倹約を旨とし，殖産興業，新田開発や学問所の開設，出生手当金の支給，老齢年金制度の実施など優れた経世を示した人物。訓女文は五徳（仁義礼智信），礼記，詩経，女誡（いましめ）を基にして養子である 10 代藩主治広の 6 人の姫が嫁ぐときに 6 人それぞれの立場に応じて嫁，妻，母としての心得を細やかに説いている書簡。本書の見返しには由来と巻の存欠に関する狩野の書き込みがあり，末尾には書き込んだ年月日もある珍しいもの。



切支丹屋敷圖（きりしたんやしきず） 1 枚

弘化 3 年（1846） 大澤貞次郎 写

江戸にキリシタンを収監する施設があった。「キリシタン屋敷」や「山屋敷」と呼ばれ, 寛政 4 年 (1792) に廃獄となるまで続いた。現在までに存在が確認されている屋敷図は非常に少ない。江戸前期，西洋の知識は宣教師から伝わることもあった。宝永 5 年（1708）に上陸し捕らえられた宣教師シドッチは，キリシタン屋敷に送られそこで生涯を終えた。新井白石の著した『西洋紀聞』は，シドッチとの数度にわたる面会（尋問）により得られた供述による。本多利明の『西域物語』には，キリシタン屋敷の住人となり和名に改名した宣教師キアラ（岡本三右衛門）への言及が見られる。

【第三門】歴史・地理

會津風土記（あいづふどき）

1 冊 天明 2 年（1782）写

会津藩の初代藩主である保科正之の命により，家老の友松氏興 (佐藤勘十郎) が領内を巡見し，編纂した地誌。会津の地形・気候・歴史・文化・産業・人口・習俗などを記述し，寛文 6 年（1666）に完成した。近世における地誌編纂の始まりといわれている。

漂泊英吉利船圖（ひょうはくいぎりすせんず）

（文政 7 年常陸國大津濱江イギリス船來ル圖）

巻子 3 軸 小沼太仲 画 写本 ［江戸時代］

文政 7（1824）年 5 月 28 日，水戸藩領の大津（北茨城市大津町）の浜に上陸したイギリス人 12 人を水戸藩の役人が尋問した時の記録絵図（大津浜事件）。同年 7 月 9 日には薩摩藩領の宝島がイギリス船に襲撃される事件が起こり，翌年の異国船打払令の一因となった。

蝦夷國全圖

1 枚　　林子平　著　年代不詳

本資料は**豬飼敬所**旧蔵でその書入がある。『三国通覧図説』付図 5 枚の中の 1 枚。『三国通覧図説』は日本に隣接する三国，朝鮮･琉球･蝦夷と付近の島々についての風俗などを挿絵入りで解説した書物。地理の知識が政治上軍事上重要であると地図の有用性を指摘しているが，正確性は乏しくかなり杜撰に描かれている。

豬飼敬所（宝暦 11 年（1761）- 弘化 2 年（1845））江戸時代後期の儒学者。近江国出身。本名は彦博。
たいへん博識であったが，中でも経書に精通していた。著書は多数あるが，刊行されたものは少なかった。狩野亨吉も数学に興味を持っていた儒学者として名前を挙げている。（「記憶すべき關流の數學家」）

山川地理取調圖

折本　二八帖　　松浦武四郎　著

安政 7 年（1860）刊

北海道（蝦夷地）を経度・緯度各 1 度ずつを 1 枚として描いた区分図。当時は内陸部を知るための唯一ともいえる地図で，測量技術の進歩により前時代とは比較にならないほどの画期的な精図である。また，松浦武四郎は 6 度に渡って蝦夷地の調査をおこない，アイヌの人々の暮らしを描いた「蝦夷漫画」や紀行本などを多数出版し，多くの人々にその様子を伝えた。

【第四門】語学・文学

喝蘭演戯記

筒井政憲　編　写本　年代不詳

文政 3 年（1820），長崎奉行であった筒井が江戸に帰るにあたり，出島のオランダ商館員らによって上演された芝居の記録。これが日本で初めて演じられた近代劇と考えられている。本資料は，観劇した筒井が，内容を理解するために通詞にオランダ語のシナリオを訳させたもの。江戸に蘭学が興ったのは 18 世紀半ば。安永 3 年（1774）には，西洋の医学書を直接翻訳した『解体新書』が刊行された。それまで中国を経由し，漢籍の形で触れることが多かった西洋の科学知識を直に入手できるようになる。自然科学が先行した西洋知識の流入であったが，さらに約半世紀を経て文芸・娯楽にも広がっていったといえよう。

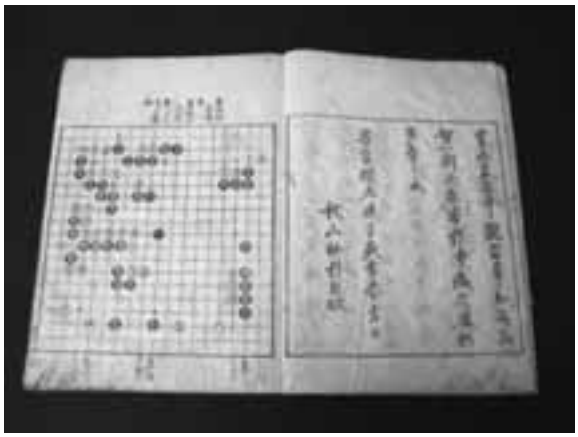
阿蘭陀芝居（おらんだしばい）

（圖卷部分）絵はがき

川原慶賀（かわらけいが）　筆　年代不詳

この絵はがきは，『喝蘭演戯記』の演目が演じられた様子を描いた絵巻『和蘭芝居巻』の一部から作成されたもの。オランダ側の日記には，この芝居を観て驚いた日本人の言葉として，日本や中国の演芸への自負が失われたと述べたと記されている。

【第五門】美術・工芸・技芸



古今當流新碁經（ここんとうりゅうしんごきょう）

2 巻　2 册　秋山仙朴正廣〔編〕

安永 3 年（1774）刊

江戸時代，幕府は碁所や将棋所を設置し，囲碁や将棋を奨励した。本書は囲碁の名局を記録したもの。安井算哲（渋川春海）が初手天元を試みた棋譜が収められている。初手天元とは，初手を盤の中央に打つ手であり，「天文の道理」との評が見られる。安井は幕府お抱えの碁衆の家系に生まれ，和算家でもあり，初の和暦とされる貞享暦を考え出した暦学者でもあった。和算や天文学は学んだ狩野であったが，碁や将棋は打たず，この分野はもっぱら集書に専念するのみであったようだ。

◇　狩野文庫の印譜

狩野は岩上方外と共編で，昭和初期までの 500 人の落款印を収録した『書画落款印譜大全』（武侠社 1931-1932）を刊行した。狩野文庫には 250 点以上の「印譜」資料が含まれ，書目類の資料とあわせ自身の商売道具の意味もあったようである。

菊池容齋印譜　2 種

狩野亨吉　編纂

（井上書店，1935.1: 和装／100 部限定），及び［私製 1 点］

本書のような印譜は，印章の印影を集めて編んだ篆刻家向けの本。製作が難しいため，部数が少ない限定版，または私家版となるのが殆どで高額な専門資料だった。したがって専門家はいたが，一般には普及しなかった。印章には書画の真贋判定において重要な価値があり，印譜には印章の登録的な働きがあるとしたのが，亨吉の科学的鑑定理論であった。

（「書画の鑑定特に落款印章の効用に就いて 」.『書画落款印譜大全 第 1 輯』（1931）所収）

【第六門】法律・政治・経済

成形圖説　30 巻 30 冊

島津重豪　編　享和 2 年（1802）序　刊本

農業に派生する事項をまとめた江戸期屈指の百科全書。薩摩藩が編纂。全 100 巻で構想されながら，原稿が完成直後に焼失したことにより，再編された全 30 巻ものとして刊行。農作業や農作物，農具などについて詳述されている。挿画は写実的で美しく，絵師の名が彫られたものもある。事項の説明には「蕃名」として西洋の語も表記された。その優れた内容から版を重ね数多く残るが，本書はごく初期の数少ない彩色本で，収集家としての狩野の面目を感じさせる逸品。

【第七門】数学

◇　和算と西洋

日本独自の数学といわれる和算であるが，『塵劫記』は中国の先行書である『算法統宗』を下敷きにするなど，海外知識からの影響も受けている。和算に西洋数学の影響があるとする見方も，狩野生前から存在していた。狩野自身は，関孝和は西洋の数学を学んでいなかったのかと問われ，以下のように答えている。

「それは分からない，まあ私共は西洋のことは知らなかったろうと思って居りますが，併し長崎には西洋人も来て居りましたし，西洋との交通は相当古くからあったのですから誰かからそう云うものを学んで居ったかもしれません。慶長の頃の砲術の本に，どうかすると西洋の考でないかと思われることが出ている。遠近の測量だとか，弾道だとか・・・・・・，だが西洋人は大した偉い人も来て居った様に思われないが，関孝和のやったことは極めて偉いのです。矢張りあの人は独創的なところが偉かったのですね。」

（「狩野博士に物を訊く会」より）

上記の狩野のように，西洋の影響があったとしても限定的であるとする見方が多いなか，数学者であり和算研究家でもあった平山諦は，『塵劫記』の成り立ちに宣教師スピノラの存在が深く関わっていたとする仮説を提示している。（平山諦『和算の誕生』. 1993）

塵劫記（じんこうき）　4 種

吉田光由によって刊行された江戸初期の代表的な数学書。そろばんやお金の計算，測量といった実用的な知識から，絵入りの遊技的な問題に至るまで，バラエティに富んだ江戸の和算文化を伝える。庶民を対象とした楽しく親しみやすい入門的な内容を備えつつ，一方で関孝和を頂点とする和算の専門的高度化へ至る流れも作った。数学を専攻した経歴をもつ狩野は，和算家とその頭脳を高く評価していた。本多利明や志筑忠雄は，狩野がその優れた業績の再発見に努めた和算家。

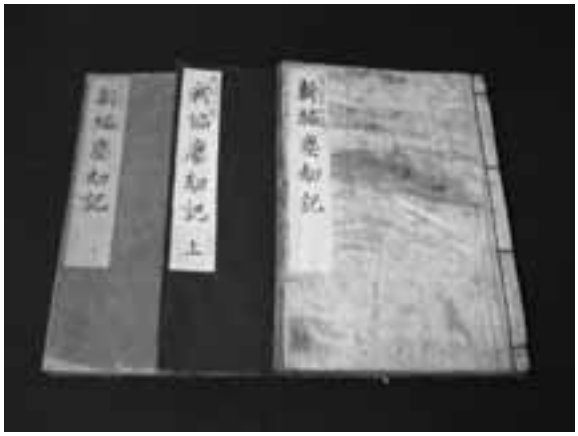
狩野文庫には全国の和算書の 3 分の 1 が集まるとも言われ，なかでも「塵劫記」の類書は 80 点を超える。『塵劫記』には，偽版やその対策に作られた改版など異版がいくつも存在し，その人気にあやかった抜粋本や増補本にいたってはさらに多く存在するためである。以下 4 種紹介する。

③新編塵劫記　下巻　寛永 18（1641）年（左上）
和算書には，他の和算家の刊行した書物に掲載された「遺題」に回答しながら，同時に自分も他の和算家に対して問題を出題するという「遺題継承」という文化があった。本書は，吉田自らが出版した最後の塵劫記であると同時に，遺題が掲載された最初の和算書としても知られている。

④新編塵劫記　三　寛文 13（1673）年（左下）
『塵劫記』は大変人気を誇ったらしく，刊行直後から，加除編集を加えた海賊版がいくつも刊行された。これらを作成する際に基になった版も様々で，ここで紹介する『新編塵劫記』は，吉田の手による前書『新編塵劫記』刊行後も，その旧版である『塵劫記』をもとに類似本が作成され続けた様子をうかがわせる 1 点。

①塵劫記　巻下　寛永 4（1627）年跋（右上）
寛永 4 年の序をもち初版本とされる『塵劫記』には，跋文に『新編塵劫記』という異名が見える。展示品の『塵劫記』は，全 4 巻のうち第 3 巻から始まる後半部しか残存していない。オリジナル同様 26 条本の体裁をとっており，実際は初版本そのものか，もしくはそれに近い版であると考えられる。全体に傷みはあるが，版木は摩耗が少なく良質な刷りである。

②塵劫記　1 冊　寛永 11（1634）年（右下）
塵劫記の体裁には，大型本と小型本の二つの系統が存在する。この寛永 11 年版は小型本塵劫記の最初のもので，この体裁が次に紹介する『新編塵劫記』に引き継がれたといわれている。



新編塵劫記　3 種

1 冊・1 冊・3 巻 3 冊

［江戸前期］

いずれも正確な刊行年は不明だが，それぞれに狩野自身が判定した年代が朱書きされており，狩野の鑑定家としての一面が垣間見える資料。

以下は，資料の表紙に狩野が記した判定年代。

①『新編塵劫記』貞享（1684-1688）以前（右）

②『新編塵劫記』元禄（1688-1704）以前（中）

③『新編塵劫記』宝暦（1751-1764）以前（左）

【第八門】理学

地轉儀略圖解（画）

折本　一帖　司馬江漢　年代不詳（刊本）

司馬江漢は，洋風画家で，天文学者でもあった。伝統的な日本画を学び，鈴木春重の名で錦絵を描いていたが，後に洋風画に転向。日本初の腐食銅版画（エッチング）も作成した。天文学の分野で，コペルニクスの地動説が日本で初めて紹介されたのは，本木良英永の『天地二球用法』（1774 年）。この書に触れた江漢は，当時の他の天文学者と同じく，必ずしも初めから地動説を信じたわけではなかった。当初は一説として捉えるにすぎなかったが，咀嚼し理解していく過程で確信を得た。江漢は本資料以外にもいくつも天文図を描いており，西洋の自然科学の普及に努めた。

【第九門】医学

解剖存眞圖

巻子 2 軸

南小柿寧一　編図　〔江戸時代〕

南小柿寧一（1785-1825）は，オランダ医学を桂川甫周に学んだ淀藩（現京都市）の藩医。原本は文政 2(1819)年に完成，シーボルトがこれを見て驚嘆したといわれる。本書は桂川甫賢の所蔵本を天保 13(1842)年に模写したもので，下巻に大槻玄沢ら当時の著名な蘭学者が跋を寄せている。江戸解剖学の到達点を如実に示し，世界の医学史上でも意義が大きい。

蘭療方（含．蘭療薬解）
2 巻 2 冊　廣川獬（ひろかわかい）　譯
文化 3（1806）年刊
『蘭療方』はオランダ医学の翻訳書。狩野文庫では，同じ廣川獬の『蘭療薬解』とセットで一資料の扱いである。後者は別書名を『蘭療方薬解』と呼ぶように，『蘭療方』中に扱われた薬物を，イロハ順で紹介した辞書にあたる。長崎通詞系になる**京都蘭学** * の初期主要著作と位置づけられ，その特色をよく示している。すなわち，銅版図付きの医学書は国内で初めての試みであり，薬名にカタカナを付した欧文を表記するスタイルは，通詞的な発想で新しかった。「直訳」に対し「義訳」を用いたり，日本にない薬物に対しては代用薬を挙げるなど，実際の利活用を重視した。

京都蘭学：江戸で『解体新書』が刊行されると，蘭学を学ぶ機運が一段と広まった。蘭学の中心は仙台，江戸，京都，大阪などであり，各地から西洋の窓口である長崎を行き来しつつ，それぞれの学風を形成した。京都蘭学は小石元俊（1743-1808）に始まるとされるが，その小石は京都を訪れた杉田玄白に出会い江戸で学ぶなど，互いに影響し合い発展した。

【第十門】工学・兵学

◇　狩野亨吉が鑑定業を営んだ頃の日本刀事情

狩野の「明鑑社」は書画鑑定並びに著述業だが，刀剣を含む「武具」関連書も多く収集しており，「刀剣鑑定」の知識もあった。（『狩野亨吉の生涯（青江舜二郎 1987 中公文庫）』に文具や短刀に関する逸話がある。）

「日本刀」の名称が広まるのは，庶民にも「外国」が意識され始めた幕末以降である。刀剣・刀装具の価値は，明治 9 年の廃刀令と昭和 20 年の敗戦（1876 と 1945）の際に著しく凋落した。その頃の流出品の数々が現在は，デザインや金工技術を高く評価され，欧米の一流美術館などで保管展示されていることは，よく知られている。開国後，西南戦争（1877）をきっかけに武器として見直されたこともあり，徐々にだが，刀剣の価格は上がっていった。国内で価値が復権するのは，海外へ美術品として大量流出していく状況に触発されて，愛刀家団体「中央刀剣会」が創立した明治中期頃からである。

大正前半は経済的に苦しい旧大名や名家の蔵品売立（うりたて）で，好景気で急激に裕福になった階層が購入することが多かった。大正後期から不景気が続くと，再び売立が頻発して一般人も入手可能な価格となるなど，刀剣の価値は世情に大きく左右された。（光芸出版編『日本刀価値考』2003）

鮫皮精義（こうひせいぎ）　2 冊
稲葉通龍（新右衛門）補正　天明 5（1785）年刊
千年以上の昔から刀剣装飾（柄・鞘）等に用いた「鮫皮」に関する専門資料。実はこの素材，「サメ」ではなく「エイ」。それも日本近海にはいない東南アジアに生息する品種である。剥いだ皮をなめしたものは，高価な舶来品だが，日本では大量に輸入し消費していた。現在も「エイ革」は加工は難しいが「泳ぐ宝石」と呼ばれる美しさで，世界中で知られている。

The sword book in Honchō gunkikō / Arai Hakuseki ; and, The book of Ｓ amé, Kōhi seigi of Inaba Tsūriō　（参考展示）
稲葉通龍［著］Henri L. Joly and Inada Hogitaro　訳
1963 年再版（New York : C.E. Tuttle）
『鮫皮精義』の英訳で，新井白石著「本朝軍器考 巻之八 刀剣之條」を合冊。訳者のアンリ･L･ジョリ（1876-1920）は，日本美術・工芸研究分野では在野の研究家として，第一次世界大戦（1914-1918）以前の日本・ヨーロッパ間で知られていた。初版（1913）は私家版として英国で刊行され，その後，日本の優れた工芸技術を海外に紹介した資料として出版社から刊行。再版もされた。

築城典刑（ちくじょうてんけい）　5 巻 1 冊
吉母波百兒（きむはべる）［C.M.H. Pel］著　大鳥圭介　訳
万延元（1860）年序の写本　年代不詳
原書は，大鳥が，砲術訓練のための私塾である縄武館の教官であったときに，ペル（Pel）のオランダ兵学書を翻訳し講義で用いていた。その後，自ら作成した和文鋳造活字（大鳥活字）で印刷したものがその初版（万延元年（1860））。展示の資料はその初版の写本で，巻末の図版は省略されている。狩野文庫には「築城附城圖」の分類があり，そこには 400 点近い資料が収められている。

Handleiding tot de kennis der versterkings-kunst　C. M. H. Pel　著
3. druk. ('s-Hertogenbosch: Muller, 1857)
「五稜郭」の設計教科書でもある『築城典刑』の原書（和訳は 1852 年版による）。オランダの築城技術書だが，守備・攻撃・修復・兵隊訓練法なども含む実戦想定の「戦い方」の実用的手引きでもあった。
福沢諭吉（1835-1901）が大坂適塾に復学の際，学費免除の名目に，本書初版（1852）から写本を作成し翻訳も提供したという逸話が残っている。当時はそれだけ価値のある内容だった。
狩野文庫は和書がコレクションの中心だが，蘭書も重要なコレクションの一つと言える。その中には本書のように和訳書と対になる資料も含まれる。

【洋　書】

Kunstwoordenboek. ‘-sGravenhage
『学術用語辞典』 1 冊
P. Weiland （ウェイラント）〔編〕
1824 年

「Aan myne lieve Oine haar von Siebold」（吾が愛するオイネへ，彼女のフォン・シーボルト）とフィリップ・フォン・シーボルトの自筆献辞がある。シーボルトは最新の日本地図（伊能図）を国外に持ち出そうとした事件により国外追放の上, 再渡航禁止の処分を受けた。娘・楠本イネは, 日本人女性で初めて産科医として西洋医学を学んだことで知られる。その娘高子も，美しい容貌等により銀河鉄道 999「メーテル」のモデルであるといわれる。

【第 3 部展示担当者】
展示監修：大原　理恵
小川　知幸（東北大学学術資源研究公開センター（総合学術博物館）助教・附属図書館協力研究員）
資料展示・キャプション作成：
菊地　良直（附属図書館情報サービス課相互利用係長）
坂野　正枝（附属図書館農学分館図書係）
近藤真澄美（附属図書館総務課学術情報基盤係）

◆　第 4 部　狩野亨吉の愉しみ

最終章では，狩野文庫の中でも挿絵等の美しい絵入り本を中心に展示する。どれも保存状態が良く，当時の色彩のまま現存しているとみられる。江戸時代の庶民文化を表したものもあり, 狩野文庫が「江戸学の宝庫」と言われる所以が見て取れる。公開するのはほんの一部にすぎず，他にも文庫には貴重な絵入り本が多く含まれ，狩野の鑑定家としての目利きの良さが反映されている。

また，公開には賛否両論があるものの，狩野の蒐集家としてのこだわりを表すものとして，これまで公開されてこなかった春本も展示している。狩野は春画の蒐集家としての声もあるが，当館には春画そのものが納本された形跡はなく，当時の官能小説の類となる春本が所蔵されているのみである。

海幸（うみのさち）

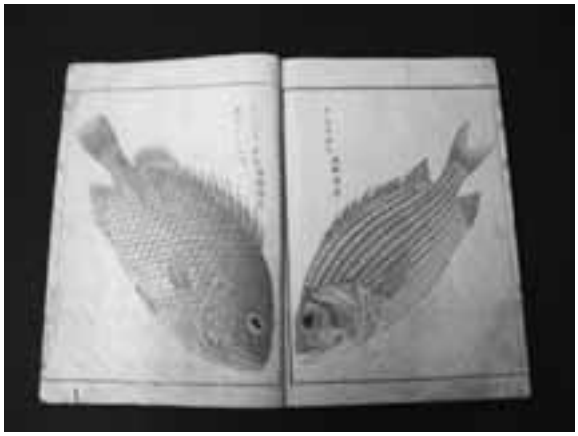
勝間龍水　画　石壽觀秀國　編　寶暦 12（1762）年

本書は俳句を記した俳書に絵をつけた絵入俳書。絵入俳書は仲間内で配られるため，趣向が凝らされており，挿絵は彩色刷りとなっている。勝間龍水（1697-1773）は町役人をつとめ，手習いの師匠もした人物。書，俳諧で名をなし，画才もあった。石壽觀秀國（1711-96）は買明門下の俳人。本書には魚介類を写実的に描いた図が豊富に載せられている。

山幸（やまのさち）

勝間龍水　画　石壽觀秀國　編　明和 2（1765）年

本書は『海幸』の続編として編まれた，絵入俳書。主に草花と虫類を題材にしている。序に秀國が「海幸既に出来ぬ又山幸なくんはあらし」と『海幸』に続いて山幸を乞うたことが記されている。『海幸』よりも刊行部数が少なく，その点から言えば，稀少と言える。



水族寫眞（すいぞくしゃしん）　鯛部（たいのぶ）

2 巻（巻之一上缺）　2 冊

奥倉辰行（おくくらたつゆき）　著　安政 3（1856）年序

木版多色刷り魚類図譜で，上下三冊から成り，上冊に鯛図九十種（鯛類ではないが名に「鯛」とつくものも含む），下冊に解説を収める。著者の奥倉辰行は江戸後期の絵師・博物学者で，本業は神田の青物商。豊富な知識と精密な写生画（写真）による色彩豊かな魚類の図譜を出版している。

花鳥寫眞圖彙（かちょうしゃしんずい）（寫眞花鳥圖會）

3 巻 1 冊　北尾重政（きたおしげまさ）　画

文化 2（1805）年至文政 10（1827）年刊

木版多色摺絵本，海外でデザインの見本集としても利用された。北尾 重政は，江戸時代中期の浮世絵師で北尾派の祖である。

融齋畫譜

二帖　中林竹洞　画

弘化 3（1846）年刊

中林竹洞は江戸時代後期に文人画の第一人者として活躍した画家。中国南宗画の研究を進め，瀟洒な山水画を得意とした。その画風は中国絵画や画法を模しながらも色彩感覚に優れた，上品で味わいのある独創性の溢れる作品を残している。

光琳畫譜

2 巻 2 冊　中村芳中　画

享和 2（1802）年跋

中村芳中は江戸時代中期から後期の絵師。主に大坂で活躍。初めは文人画風の作品を描くが，次第に光琳に傾倒した作品を描いた。光琳畫譜は江戸に下った際に垂らし込みの技法などの光琳様式によって描いた作品で，コミカルな描写と洗練された巧みな表現などに定評がある。

狂齋畫譜

1 冊　河鍋曉齋　画

萬延元（1860）年序

河鍋曉齋は，幕末から明治にかけて活躍した絵師。はじめ狩野派に入門，その後他派の画法を学ぶことにより独自の画風を展開し，浮世絵や多くの戯画・風刺画を残した。その確かな画力と，構成力や表現力に基づく芸術性は海外でも高く評価されている。

職人盡歌合

1 冊　土佐光信　繪　甘露寺親長　詞

写本［写年不明］

室町時代に成立したとみられる職人を題材とした歌合。142 種の職人が左右に分かれ 71 番の取り組みを作る。絵の余白には画中詞と呼ばれる職人たちの日常会話や口上が記入されている。歌合とは，左右に詠み手が分かれ，それぞれが詠んだ歌を判者が優劣を決めるという和歌の一形式である。

今様職人盡歌合

2 巻　2 冊　新泉園鷺丸　編 鍬形紹眞　画

文政 8（1825）年刊

狂歌絵本で，蕙斎（鍬形紹眞）は上下 2 巻 36 枚の絵のなかに計 72 人の職人を描いている。そのなかには漫才，鳥追い，井戸堀り，居合抜など職人らしくない珍しい商売も見られる。狂歌の判者は当時俳諧歌論争で犬猿の仲になっていた宿屋飯盛と鹿都部真顔で，それぞれ序と跋を分担している。

繪本狂歌山滿多山

3 巻 3 冊　大原亭炭方　撰　葛飾北齋　画

享和 4（1804）年　江戸蔦屋重三郎　板

本書は北斎が手がけた絵入狂歌本の中でも傑作とされる作品の一つで，主として江戸・山の手の勝景を描いた全 32 図の名所風景画を載せる。北斎がこの時期に絵入狂歌本の領域で創出した，風景と人物を巧みに融和させた独特の構図を見ることができる。

いろは別春畫好色本目録

1 冊　写本［写年不明］

春画好色本とは，特に江戸時代に流行した男女の性的な営みを描いた絵画や，好色的な内容の本文を持つ本で，出版統制下にあっても需要があり，有名絵師もそのほとんどが春画を描くなど多数の作品が流通していた。本書はそれらの目録。狩野亨吉は鑑定のみならず，浮世絵や春画の収集でも有名であったが，本書は書誌研究の営みを表す一つと言えよう。

傾城買四十八手

1 冊　山東岩瀬京傳醒　撰並書

寛政 2（1790）年刊

さまざまな職業や性格の遊客と，それぞれ異なる地位の遊女との座敷・閨房（けいぼう）における会話を描いて評を加えたもの。傾城買いのさまざまな方法を示すと共に恋愛の内面的観察に立ち入ろうとしているもので，心理描写に優れた洒落本の代表的傑作である。

青楼繪抄年中行事

2 巻　2 冊

十返舎一九　撰　　喜多川歌麿　画

明治年間（享和 4（1804）年板再刷）

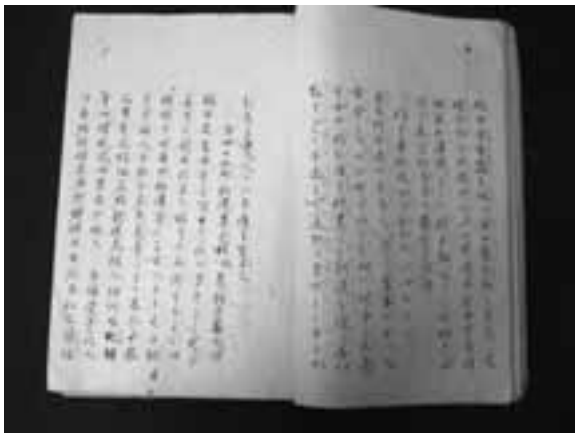
吉原の年中行事や遊女品定め遊客心得など，遊郭の習慣やしきたりについて書かれた本。題簽に「吉原青楼年中行事」とある。青楼とは，遊女屋，妓楼のことで，江戸では特に吉原遊郭をさした言葉。昔，中国では高貴な美人のいる楼に青漆を塗ったことに由来する。

長枕褥合戰

1 冊　風來山人　平賀源内　撰

安政 7（1790）年刊

平賀源内が風来山人の名義で著した浄瑠璃仕立ての戯作。尼将軍政子の腎虚を治療する丹薬を造るのに必要な男女の淫水を集めるため，若侍と御殿女中百組がいっせいに交わる話など，社会風刺や皮肉・滑稽を盛り込み，批判と反骨に満ちた一面をも覗かせる。



色道禁祕抄　乾坤

2 巻 2 冊　大極堂有長　著

写本［写年不明］

禁中（宮中）の故実や作法を記した『禁秘抄』をもじって名付けられた著名な性典。内容は問答形式で色道（男女の交わり）について書かれたもので，性指南書として必要な事柄が網羅されている。漢学者として名高い中島稼隠の戯作であるとの説がある。

【第 4 部展示担当者】（敬称略）

展示監修：大原　理恵

資料展示・キャプション作成：

南館　義孝（附属図書館医学分館運用係長）

影山　啓太

山田麻友美

◆　最後に

多岐に渡る狩野亨吉の大コレクションは，彼の生涯そのものである。しかしながら，当館に所蔵されている資料以外にも，全国各地の各機関において保存されており，あまりにも膨大すぎる量のため，その全貌はまだ明らかにされていない。自身の形跡を後世に残したがらなかった狩野だが，皮肉なことに生涯をかけて蒐集した蔵書が，彼の存在を今なお息づかせている。

（むらかみ　やすこ，附属図書館情報サービス課長）

■　参考文献（展示資料を除く）

・小林勇『隠者の焔』，文藝春秋，1971
・『ものがたり東北大学の至宝』編集委員会編『ものがたり東北大学の至宝』，東北大学出版会，2009
・水島宜彦『水島耕一郎評伝』，文芸社，2012
・東北大学編『東北大学五十年史』上・下，東北大学，1960
・東北大学百年史編集委員会編『東北大学百年史 四 部局史 一』，東北大学出版会，2003
・石井敦編『図書館を育てた人々：日本編』，日本図書館協会，1983
・東北大学附属図書館百周年記念事業実施 WG 出版班編『もっと近くに 煌めいて遠くへ：東北大学附属図書館百年の歩み』，東北大学附属図書館，2011
・新田義之『東北大学の学風を創った人々』，東北大学出版会，2008
・江戸東京博物館・東北大学編『文豪・夏目漱石：そのこころとまなざし』，朝日新聞社，2007
・『明治・大正期の文人たち－漱石をとりまく人々－：平成 15 年度東北大学附属図書館企画展』，東北大学附属図書館，2003
・仙台文学館編『夏目漱石展－「漱石文庫」の光彩：開館記念特別展』，仙台文学館，1999
・夏目金之助，『漱石全集』全 28 巻別巻 1 補遺 1，岩波書店，1993-2004
・原田哲・石田忠彦・海老井英次編『夏目漱石周辺人物事典』，笠間書院，2014
・秦郁彦『漱石文学のモデルたち』，講談社，2004
・よど秀夫『守農太神安藤昌益』幻冬舎ルネッサンス，2009
・松尾龍之介『長崎蘭学の巨人:志筑忠雄とその時代』，2007
・近藤悦夫『安藤昌益に魅せられた人びと：みちのく八戸からの発信』，農山漁村文化協会，2014
・岩生成一編　『近世の洋学と海外交渉』，巖南堂書店，1979
・吉田徳寿『安藤昌益:直耕思想いま再び』, 東奥日報社，2010
・八戸市立図書館『安藤昌益』，伊吉書院，1974
・中野利子『H・ノーマン：あるデモクラットのたどった運命』，シリーズ民間日本学者，リブロポート，1990
・安藤昌益研究会編『安藤昌益全集』全 21 巻別巻 1，農山漁村文化協会，1982-2004
・ラードゥリ = ザトゥロフスキー著 ; 村上恭一訳『安藤昌益の世界：18 世紀の唯物論者』，雄山閣出版，1982